
地域における社会包摂機能を備えた劇場の運営 ～ウェスト・ヨークシャー・プレイハウス～

公益財団法人宮城県文化振興財団
東京エレクトロンホール宮城（宮城県民会館）企画事業課 主事

野口まどか

はじめに

ウェスト・ヨークシャー・プレイハウス（以下WYP）は、英国グレートブリテン島の中部、ロンドンから電車で2時間半ほどの地方都市リーズの中心部にある。ヴィジョン等で「全ての人にとってVital Theatre（必要不可欠な劇場）である」と明言し、芸術性の高い作品制作と、社会包摂機能を備えた事業を幅広く展開している。後者の事例を中心に、地域での劇場運営をどのように行っているのかみていきたい。

1. WYPの概要

WYPの前身、リーズ大学キャンパス内にあったリーズプレイハウス（1970～1990年）が手狭になったことなどから、1990年、現在の場所に建設された。ウェスト・ヨークシャーの自治体から多くの補助金を受けていたため、WYPの名になった。

劇場には、2つのホール、装置等をつくる工房、リハーサル室等があり、作品制作の全てを劇場内で行うことができる。また、徒歩数分の別ビルには、後述するプログラム、ファーストフロアの専用スペース等がある。

収入の30～35%が公的助成金、残りの65～70%がチケットや貸衣裳、バーやレストランからの収入である。

組織[表1]は、16人の理事から成る理事会と、2人

の最高責任者（経営監督と芸術監督）や各部長等が協議し、意志決定を行っている。理事には、アーツカウンシルのリレーションマネージャーがおり、WYPとアーツカウンシルのパイプラインを担う。理事会の実施は約2カ月に1度だが、理事会の中に、クリエイティブ・エンゲージメント関連、資金調達、改修について等の小委員会をつくり、各委員会で年3～5回ミーティングを行っている。

スタッフは約150人（レストランスタッフ含む）、他にパートタイムのスタッフやフリーランスのアーティスト等、ボランティアスタッフがいる。アーティストは、それぞれの作品に合った芸術性の高いアーティストを選ぶため、継続雇用はしていない。

社会包摂機能を備えた事業は、クリエイティブ・エンゲージメント部（創造的関わり、参加といった意味。以下CE部）が14人のスタッフで実施している。

2. CE部による取組

「地域のために何ができるか」を考え、事業対象を5つに分けて、あらゆる層にアプローチし取り組んでいる[表2]。

(1) 若者対象のプログラム

特徴的なプログラムの一つに、「ファーストフロア」

がある。関係者へのリサーチを経て、若者に向けたワークショップ等をする場所が必要とわかったため、資金調達をし、劇場近くのビルを丸ごと購入した。元々の劇場を会場にするのではなく専用のビルにした理由は、若者にとって、自分たちだけの専用空間が常にあることにより、いつでもいける居場所ができるからだ。また、劇場の中だと、敷居を高く感じてしまう若者もいるが、別の建物だと入りやすい。ファーストフロアに慣れることにより、劇場にも興味をもち、そちらへ踏み出す若者もいる。

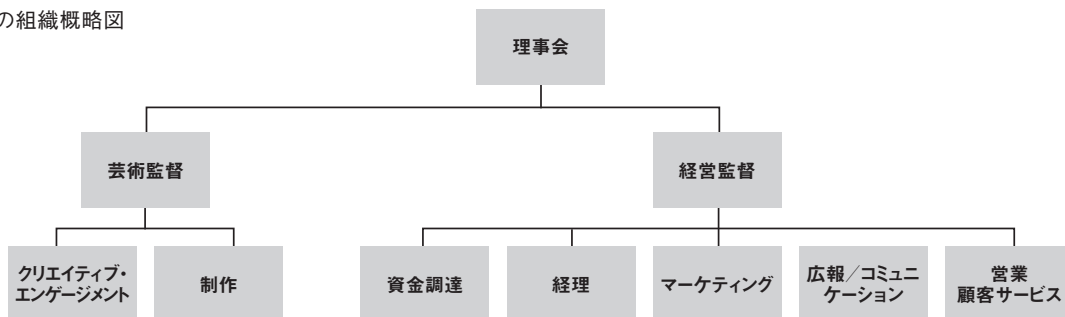
ファーストフロアでは、アーツアワード(芸術分野の単位)を取得できる。英国では、教育委員会の認可

を受けた機関が、学校の単位を与えることができるシステムがあり、芸術機関であればアーツアワード、企業であればビジネス関連の資格が取れるなど、さまざまな機関にアウトソーシングしている。

プログラム実施に際しては、アーティストは質の高い作品をつくるのと同様のプロ、そしてユースワーカーやソーシャルワーカーが、さまざまなバックグラウンドをもつ若者をサポートしている。

また、学校教育対象の事業では、学校関係者と協働し、プログラムを制作している。劇場側がやりたいことだけでなく、社会課題や学校側のニーズに合わせたプログラムもある。先生が劇場をツールとしてど

[表1] WYPの組織概略図



[表2] クリエイティブ・エンゲージメント部による主な事業

対象者	主な事業	対象詳細	概要
①若者	First Floor	11～19歳 障がい者は14～25歳	専用スペースあり、WSと発表会 など アーツアワード(芸術分野の単位)を取得できる
	Youth Theatre	8～19歳	作品制作と公演、自主制作公演への出演
	学校教育	学校や教師	プログラム制作、WSや公演の実施(劇場内/アウトリーチ)、公演チケットの格安提供(無料にはしない)、Webでのプログラム無料提供
②高齢者	Heydays	55歳以上	毎週水曜日にさまざまなプログラムを実施、発表会あり
	Our Time	認知症患者と家族	WS
	Dementia Friendly Performances	認知症患者と家族	鑑賞しやすい公演日の実施
	アウトリーチ	劇場に来られない高齢者	
③障がい者	Buzz	14～25歳	WS、First Floorで実施
	Beautiful Octopus Club	18歳以上	パーティー、劇場スタッフ指導による発表会もあり
	Relaxed Performances	障がい者と家族	鑑賞しやすい公演日の実施
④コミュニティ	Theatre of Sanctuary	難民や亡命者	女声合唱団、WS、公演招待、プレゼンテーション技術のWS
	アウトリーチ	来館者の少ない8地域	地域でのWSや公演ツアー
⑤トレーニング・技術を学ぶ			

う展開していけるかについても提案する。学校が、1年前にはカリキュラムを作成するため、早めに企画し、提供できるプログラムをパンフレットにして学校に配布する。希望校を公募するだけでなく、劇場側からターゲットを決めて、例えば劇場に足を運ばない家庭が多い地域等にアプローチもしている。

(2) 高齢者向けプログラム「ヘイデイズ」

WYP開館時から実施しており、毎週水曜の10時～15時、劇場のあちこちで多彩なジャンルのプログラムが行われている。美術や手芸、工芸、文芸、演劇、ダンス、合唱、ディベートなど、多岐にわたるプログラムにより、さまざまな興味をもった人が参加できる。参加者がいきいきとしているのが印象的で、素晴らしい居場所と時間を提供しているのが体感できた。

手芸コースの講師を務める女性アーティストは「教えたことをそのままやるのではなく、子どもたちと同じように自由な発想で、実験的なことをするようにアドバイスしている」と話していた。伝統的な手法だけでなく、新しい素材や手法にも取り組んでいた。当プログラムの主目的は全ての高齢者を孤立させないことだと思うが、芸術により、ただの生涯学習講座ではなく創造的な場にもなっていると感じた。

参加者特典にはカフェの割引があり、他の曜日にも集まって活動したり、お茶を飲んだりしているようだ。

(3) アクセシビリティ—鑑賞しやすい公演日の設定

劇場ウェブサイトのアクセスのページには、交通アクセスではなく、アクセシビリティ（劇場や公演がどのようにアクセスしやすいか）が載っている。アクセスしやすい公演を提供するのもCE部の仕事だ。例えば、手話や字幕付きの公演、ヘッドフォンの貸出、認知症患者や障がい者が鑑賞しやすい公演（サポートスタッフの配置、音響や照明等の刺激を和らげる、座席配置への配慮、等）を実施している。それらは、わかりやすいマークでウェブサイトやチラシに掲載されている。

また、このアクセシビリティに特化した資金調達を、資金調達部と連携して行っている。

(4) コミュニティへの取組

劇場に（劇場が）到達しにくい地域（Hard to reach）に対して事業を行っている。

特に来館者の少ない8つの地域（チケット売上から割り出し）に対して、CE部は積極的に関わっている。本当は全地域を対象にしたいが、広すぎるため、特定し重点的に取り組んでいる。8地域に共通しているのは、貧困層が多いことだ。自殺率の高い地域や、刑務所があり出所後の人が多く住む地域もある。

地域のコミュニティセンターや学校に入っていく、なぜ劇場に来ないのかを調査する。各地域にアンバサダー（親善大使。コミュニティセンターのスタッフやユースワーカー等）を配置することで、事業展開のサポートや、地域の人が劇場へ行く橋渡し役を担い、劇場が地域との信頼関係を築く支えとなっている。

事業例に、地域での公演ツアーがある。プログラムは、ツアー専用のもや、劇場での公演作品をツアー用にアレンジすることもある。ツアーメンバーは、役者2名、CE部2名、制作部3名（舞台監督、技術、チケット担当）の他に、管理職が1名、事業系以外の経理や広報なども必ずツアーに行き、どういうものかを見ている。

(5) 難民対象プログラム

コミュニティ対象事業の中に、難民や亡命希望者を対象としたプログラムがある。

なぜ劇場が難民に？ 答えは、やるべきだし、できることがあるから、だった。難民も、当然のように全ての人の一部なのだ。

まず、劇場が難民に対して何ができるかを検討する。関係者へのヒアリングを経て、安全面や物質的なものは足りているが、人生の楽しみ（Quality of Life）がないとわかったので、ワークショップや公演への招待を行い、難民による女声合唱団を結成した。また、難民がプレゼンテーションのスキルを学べるワークショップも行っている。彼らはどういう経緯で自分が難民になったかを申請しなくてはいけない。言葉やコミュニケーションの壁を取り払う役割を、劇場も担っている。

全てのプログラムに共通して、地域の徹底的なリサーチを経て効果的なプログラムをつくり、実施し、改善を重ねている。

3. これからのWYPの課題

(1) 施設の大規模改修

街の変化や、人の流れの変化に対応し、正面玄関を現在と反対側に変更する予定である。また、改修のための資金調達も行っている。

(2) 資金調達部

2～3年前に始めた新たな枠組みが現在順調に進んでいる。企業に対しては、各々とよく話し、その企業に合った方法や金額を提案する。さまざまな対象と方法を、偏らざるまんべんなく伸ばすよう努めている。そうすることで、社会情勢が変わったとしても、安定した資金調達を目指す。

今後は、劇場のスタッフ全員が資金調達の担当である、という意識をもつことが課題である。資金調達に限らないが、部署は違っても、劇場でやっていることは全てスタッフ全員が担当者である、その意識をもって取り組むことを目指している。

(3) クリエイティブ・エンゲージメント部

コミュニティの中で孤立している人、特に高齢者や認知症患者に対して、誰ひとり孤立させない事業のさらなる展開を目指している。

4. 最後に

社会的包摂という社会的課題に対して、公立劇場、特に地域の劇場ができることはたくさんあるのではないかと、当研修を経てさらに強く感じた。

日本では、すでに社会包摂機能をもった取組を行っている劇場に対して、「あの劇場は特別」「あの人がいるからできること」と捉えられたり、何から始めたらよいかわからなかったりするのではないだろうか。しかし、WYPの多くの事例をみると、すでに似たような事業がある劇場は、日本にもたくさんあるのではと感じた。事業自体が目的になってしまうのではなく、組織や事

業のミッションを明確にし、視野を広くもって既存の事業を整理すれば、かなりの劇場が一步を踏み出せるのではないかと。

それには、WYPで聞いた「地域とつながり信頼関係を築くこと、地域の人の声を聞き、地域の人にとって何が必要かを探っていくこと」が必要不可欠だ。

また、劇場として、必ずそこには質の高い芸術があるべきで、しっかりと芸術があるからこそ、社会包摂機能を備えた事業も素晴らしい展開ができるのであり、その両輪が必要だと感じた。これまで貸館しか行っていなかった会館にとって、そのハードルは高いが、そこで臆することなく、外部組織と協働するなど、今できることを考え、歩み始めたい。

施設概要 ウェスト・ヨークシャー・プレイハウス



- 名称 ————— West Yorkshire Playhouse
- 所在地 ————— Playhouse Square, Quarry Hill, Leeds, LS2 7UP
- 開館年 ————— 1990年
- 主な施設 ————— 主劇場にはクオリーシアター(固定約750席)、コートヤードシアター(可動約350席)、工房、リハーサル室、会議室、レストランなど。ファーストフロア用ビルにはファーストフロア専用スペース、衣裳部屋、リハーサル室などがある。
- 年間自主制作作品 — 29本(2013～2014年)
- 年間予算 ————— 約650万ポンド(2013～2014年)
- URL ————— <https://www.wyp.org.uk/>